

3つの新工夫 (図形楽譜・身体表現・ICT)  
を導入したJ-POPサウンドの学び：  
小学校音楽科の授業実践にみる真の学習意欲と効果

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-10-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉村, 治広 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10098/00028515">http://hdl.handle.net/10098/00028515</a>

### 3つの新工夫(図形楽譜・身体表現・ICT)を導入したJ-POPサウンドの学び

#### —小学校音楽科の授業実践にみる真の学習意欲と効果—

吉村治広(福井大学)

#### 目的

平成29年度から3年計画で進めている「小学校音楽科における児童の興味関心とICTを活用した『深い学び』の開発」をテーマとする研究(科学研究費助成事業 基盤研究(C)17K04535)の一環として、米津玄師「Lemon」を教材に、図形楽譜・身体表現・iPadを活用した「音色の重なり」を指導内容とする学習モデルの有用性を、児童の(実践者・研究者の意図に付度したみせかけの学習意欲ではない)「真の学習意欲」の視点から明らかにする。

#### 結果

難易度の高い「よく聴く」活動においても、児童から好まれているJ-POP曲を対象としたことで、終始、旺盛な学習意欲が持続した。重なり合う音色の関係が理解しやすい「図形楽譜」と、音の動きが視覚化された学部生制作の「身体表現」動画も聴取活動のヒントとして有効に機能した。さらに、サウンドに溶け込んでいる弦楽器の音色をiPadアプリの「バイオリン」や「エレキギター」の音で演奏・比較することにより、児童は音色に対する知覚を鋭くし、それぞれの音色のイメージを「Lemon」の音色の重なりの中に結び直していった。何より無記名アンケートに回答された圧倒的な授業の「楽しさ」評価平均点に、3つの新工夫の確かな相乗効果と児童を「深い学び」へと誘う可能性が示されていた。

#### 方法

2校の教員がそれぞれ2時間連続で実践した、ほとんど同じ内容の授業(平成30年12月のS市T小学校6年生23名を対象とするものと平成31年2月にF市F小学校3年生30名を対象とするもの)の有用性について、授業後のアンケート、及び、参観・授業補助として参加した学生・院生の観察レポートの記述から分析・考察する。なお、一人一台ずつiPadが割当てられた児童は、GoodReader(聴取・視聴用)とThumbJam(演奏用)のアプリを使用した。

#### 内容

##### 1. 授業の概要

(i)「Lemon」の冒頭6秒を聞かせ「音の重なり」

についての学びを動機づける。

(ii)「Lemon①」(冒頭～26秒)部分の聴取活動;聞こえた音色(楽器の音)を聞き、図形楽譜を使って聞こえる音を確認する。

(iii)「Lemon①」～「Lemon②」(27秒～48秒)部分の聴取活動;iPadとヘッドホンを使って聞こえにくい音をよく聴き、「ヒント動画」も参考にしながらワークシートに聞こえた音の特徴を記入する。さらに、聞こえた音を全体で確認する。

(iv)「Lemon」のサビで聞こえるストリングスの音をThumbJamで演奏し、音色とその重りの効果を体感する。

##### 2. 二つの実践における工夫の効果

###### (1)(i)～(iii)の聴取活動について

授業冒頭、聴取活動の教材として「Lemon」が流れると、T小学校では嬉しそうに顔を見合わせる者やガッツポーズをする者の姿がみられ、F小学校ではクラス中が一緒に歌い出してしまった。それほど「Lemon」は児童からよく知られ、好かれていた。(授業後に5点満点で調べた嗜好平均点:T小学校=4.52点、F小学校=4.34点)そしてそれが授業への期待を一気に高めたことは、「「Lemon」は子どもに大人気の曲なので、授業のはじめから楽しく授業を受けることができていた」等と観察レポートにも記されたとおり、誰の目にも明らかであった。

授業後の児童による聴取活動に対する「楽しさ」評価点(普通の授業を5点とし10点満点で評価、高得点ほど楽しい)の平均は、T小学校=9.83点、F小学校=8.80点、「難しさ」評価点(「楽しさ」評価と同じ基準、高得点ほど難)の平均は、T小学校=6.40点、F小学校=4.23点となった。「楽しさ」評価点は両校とも十分に高いものであったが、とりわけT小学校の6年生児童にとって、「Lemon」の音色を聴き分ける活動は普通の授業より難しく感じながらも、極めて楽しいものであったことがわかる。具体的な「楽しさ」の理由としては、「音学もLemonもiPadもすきだから」「えいぞうがおもしろかった」(F小女子)、「イヤホンでやったから」「なんのがっつきか、あてるのがたのしかった」(F小男子)、「今までそんなことを気にしないで聞いていたから」(T小女子)、「その音に一生けん命になれたので、よかった」「こたえがむずかしくしらないのでもわかる」とてもたのしい」(T小男子)等が挙げられていた。

一方で、このような評価点や理由に表れた両校児童の回答の違いについては、学年による発達段階の他、音楽経験の違いも影響している。実際、授業以外で1年以上の音楽的な経験のある児童の割合は、T小学校で男子：17%、女子：36%であったのに対し、F小学校では男子：54%、女子：71%となっていた。加えて、授業者が児童の様子をみながら展開した聴取活動の時間にもかなりの差（T小学校＝44分40秒、F小学校＝60分10秒）が生じていた。つまり、3年生ではあるが、音楽経験者の多いF小学校の児童に時間をかけて展開した聴取活動は、むしろ普通の授業より少し易しく感じられるものとなり、そのワークシートには記入量の多いものや多様なオノマトペ表現が散見された。

「身体表現」動画の有効性については、T小学校：87%、F小学校：82%の児童が「ヒントになってとても役に立った」「音が分かりやすくなって役に立った」と答えていた。観察レポートにも「ヒント動画を何回もみながら一緒に手を叩いてみたり、頭でリズムをとるなど一生懸命聴きとろうとしている児童が多かった」（T小）、「ヒント動画をみると新たな音に気付くことができていた。やはりヒント動画は効果的だと思う」（F小）と報告されていた。

## (2) (iv)の演奏活動について

演奏活動に対する「楽しさ」評価点の平均は、バイオリンの音色での演奏時でT小学校＝9.48点、F小学校＝7.63点、エレキギターの音色での演奏時でT小学校＝9.83点、F小学校＝7.30点となり、「楽しさ」評価点の平均は、T小学校＝3.91点、F小学校＝6.80点となった。演奏活動は、聴取活動とは逆にT小学校児童が普通の授業より易しいと感じ、F小学校児童が難しかったと感じていた。また、T小学校児童には引き続き極めて楽しい活動となった。具体的な「楽しさ」の理由としては、「バイオリンの方がおちつきがあって自分にあっていない」（F小男子）、「2つともひいたことがないから」（F小女子）、「iPadでこんなに楽器が演奏できるのはすごいと思ったから」（T小男子）、「ゆらすとひびくところなどがそれぞれ本物で演奏しているようだったから」「エレキギターなんか格好いいし、バイオリンは『Lemon』っぽいから☆」（T小女子）等が挙げられていた。

F小学校の実践では、十分な演奏活動の時間が確

保できないまま活動が終わってしまったことで、「きょくがはやかった」「ついていけない」「ひくばしよがわからない」といった記述もみられた。それでも、バイオリンとエレキギターの音色について尋ねる問いには、両校とも児童の多くが「やさしい」感じが「かっこいい」「はげしい」感じに変わると表現し、「もりあがり」「ロックな感じ」「はく力」の違いが十分に感受されていることが確認できた。

さらに、この活動を踏まえ、本物のバイオリンやエレキギターを弾くことへの意欲を尋ねたところ、T小学校では、どちらも頑張っけて弾けるようになりたいと思う児童が約6割、エレキギターを頑張っけて弾けるようになりたい児童が1割強、残り3割が本物の楽器よりiPadを弾くことに興味があると回答した。F小学校では、どちらも弾きたいという児童は3割強にとどまる一方、エレキギターの人気が高く、3割弱の児童が弾けるようになりたいと考えていた。iPadを弾くことに興味のある児童は2割程度で、約1割の児童がT小学校ではみられなかったバイオリンを弾けるようになりたいとの回答をした。なお、実践中の2つの音色の好みを尋ねる場面では、両校とも、大多数の児童が「かっこいい」エレキギターの方を好むと答えていた。

## 3. 「真の学習意欲」の働き

例えば、ピンク色の「ヘッドフォンをもらってかわいいと言っている児童がいたりして、テンションが高くなっていて」ように小さな工夫にも活動を動機づける可能性がある。そのような複数のフックが活動に編み込まれ相乗効果を上げたからこそ、「休憩時間でも、まだヘッドホンで真面目に「Lemon」を聴いている児童」や「子どもたちは、「難しい」「分からん」と言いながらも、決して諦めずに活動に取り組んでいる」姿へと発展していった。

授業全体の「楽しさ」を尋ねた評価点の平均は、T小学校＝9.96点、F小学校＝9.00点であった。（「17点」「10兆点」等の記述は「10点」で計算）さらに、「Lemon」を授業で歌ってみたいか尋ねたところ、両校とも3割程度の児童が「前からずっと」歌いたいと思っており、6割程度が「活動しているうちに授業で歌いたくなった」と答えた。学習意欲が「真」である時、さらなる（生楽器や歌への）興味が湧き、活動が動機づけられる。主体的に学ぼうとする態度が形成され、学びも深まっていくのである。